

日本人中学生におけるタスクリピティション活動 と中間言語の発達

橋本 慎一（東京家政大学大学院）

キーワード：日本人中学生，タスクリピティション，中間言語

1. はじめに

この調査の目的は、日本人中学生がスピーキングにおけるタスクリピティション活動を継続して行うことにより、どのように中間言語を発達させていくかを観察することにある。Bygate (1987)によれば、スピーキングの能力を車の運転に例え、知識(knowledge)と技能(skill)が相互に補完しあいながら発展するものであり、授業にスピーキング活動が設定され、実際に話すことを通してはじめて能力が育成されて行くとしている。そこで、教科として英語学習に取り組む日本人中学生を対象に継続的にスピーキングにおけるタスクリピティション活動に取り組みせることにより、その中間言語がどのように発達していくのか観察した。

2. 研究の背景

(1) SLA の理論

Ellis (2010)によれば SLA は、多数の理論によって構成されている研究分野である。特に最近では、SLA の研究者が認知的側面と社会的側面のどちらの方向性を採用するかに議論が集中している。このような議論は相反する理論をも満足させられる評価規準が特定されれば収束するのであるが、そのような評価基準は未だに発表されていない。よって、理論を多元的に受け入れることが歓迎されることとなっている。しかし、どの SLA の理論にも取り上げられている現象として「変化」が挙げられる。この「変化」とはある安定した事象から次の段階の安定した事象に移る時に起こるものであり、次のように定義される。

(2) 変化の定義

Ellis (2010)は表 1 のように「変化」が観察される 4 つの段階を定義している。

表 1 : 「変化」が観察される 4 つの段階

1. The learner could not do x at time a (the 'gap')
2. The learner co-adapted x at time b ('social construction').
3. The learner initiated x at time c in a similar context as in time b ('internalisation/self-regulation').
4. The learner employed x at time d in a new context ('transfer of learning').

更に「変化」が起こる 3 つの Level を表 2 のように分けて定義している。

表 2 : 「変化」の 3 つのレベル

Level 1	何らかの足場かけによって、社会的行動に基づき引き起こされる変化
Level 2	学習者が新しく修得したものを使えるかどうか、初めて出現した時と同じ文脈の中で試すことによって、他者の足場かけなしに引き起こされる変化
Level 3	学習者が全く異なる文脈の中で学習したものを応用することから引き起こされる変化

これらの「変化」は修得の「深さ」に関係しており、修得は修得したかしないかという二元論で定義されるものではなく、「変化」の Level が複雑に絡み合いながらダイナミックに構成されていく。(Larsen-Freeman, 2007)

3. 方法

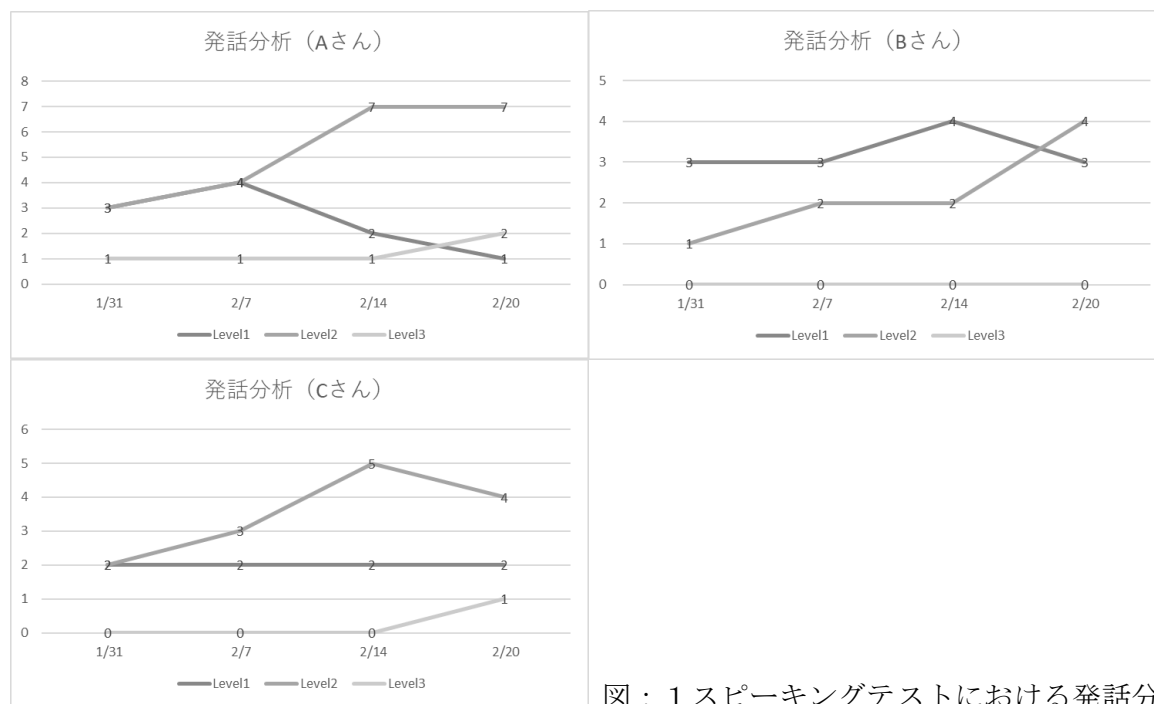
日本人中学生における中間言語の発達を調査するため、中学 2 年生 10 名を対象に、約 1 ヶ月間に渡り、週 4 回タスクリピーション活動を行った。活動内容は“One Minute Chat”というフリーカンバセーション活動で、授業開始後の約 10 分間程度を使い、まず、教科書の題材をベースとしたワークシートで定型表現の口慣らしをした後、生徒同士のペアで相手を変えながら 1 分間の自由会話を 3 回行う活動である。週 4 回の活動の後、毎週末に教師と 1 対 1 でスピーキングテストを約 1 ヶ月間に渡り 4 回行った。分析に当たっては Ellis (2010) に示されている学習と発達における「変化」の 3 つの Level (表 2) に従い次のように分類した。

表 3：産出における「変化」の 3 つのレベルの定義

Level 1	現在学習しているワークシートや教科書に提示されている定型表現もしくは、定型表現の一部を入れ替えて産出されたもの
Level 2	過去に学習したワークシートや教科書に提示されている定型表現もしくは、定型表現の一部を入れ替えて産出されたもの
Level 3	今までに学習したことのあるワークシートや教科書に提示されていない表現、もしくは既習事項を組み合わせで産出したもの

4. 結果と考察

分析の結果、図 1 のように、主に 3 つのパターンに分類された。



図：1 スピーキングテストにおける発話分析

どの生徒も Level1 と Level2 の出現の比率が反比例して現れており、質問内容や自らの考えを伝えたいという意思によって発話を調整しながら会話を構成している様子が見えてきた。生徒のインタビューによれば Level3 に関しては、意識的に発話していないようであった。

5. 引用文献

Bygate, M. (1987). *Speaking*. Oxford: OUP.
 Ellis, R. (2010). Theoretical pluralism in SLA: Is there a way forward?. In *Conceptualising 'learning' in applied linguistics*. Palgrave Macmillan, London, 23-51
 Cameron, L., & Larsen-Freeman, D. (2007). Complex systems and applied linguistics. *International journal of applied linguistics*, 17(2), 226-239.